

看護学生の認知症高齢者に対するイメージと影響要因の文献検討

中村 勝喜*¹ 高木 初子*²

Student Nurses' Images of Older Adults with Dementia and Their Influencing Factors: A Literature Review

NAKAMURA, Katsuki and TAKAGI, Hatsuko

要旨

本研究の目的は、看護学生が認知症高齢者に対してどのようなイメージを抱いており、そのイメージに影響を及ぼす要因との関連性を先行文献で明らかにし、今後の認知症高齢者に対する老年看護学教育への示唆を得ることである。

全ての学年において、認知症高齢者に対する否定的イメージは存在していた。しかし、否定的イメージの内容は、1・2年次のマスメディアによる一方向性からの否定的イメージと3・4年次の臨地実習での認知症高齢者との関わりで生じた否定的イメージに違いがあることがわかった。肯定的イメージは、1・2年次にはほとんどみられなかったが、3年次になると増加し、さらに、4年次になると臨地実習で得た達成感による肯定的イメージが増加していた。

以上より、1・2年次早期から認知症高齢者と接する機会を設ける、3・4年次の臨地実習では、学生が抱いている様々な感情を表出でき、共有することができるカンファレンスなどを開くことで、老年看護学教育として認知症高齢者への関わりを学ぶことができる。

キーワード

看護学生 認知症高齢者 イメージ 教育

Abstract

The objective of this study is to shed light on student nurses' images of older adults with dementia and identify factors that affect such images through a review of existing literature. The findings could inform geriatric nursing practices for older adults with dementia in the future.

Students from all school years were found to hold negative images of older adults with dementia. Freshmen and sophomores tended to hold negative stereotypical images generated through mass media; in contrast, juniors and seniors tended to hold negative images generated as a result of involvement with older adults with dementia in clinical training. While freshmen and sophomores held almost no positive images, the number of such images increased among juniors, and further increased among seniors, resulting from a sense of accomplishment obtained through clinical training.

These findings suggest that, for learning involvement with the older adults with dementia as geriatric nursing education, freshmen and sophomores should be given opportunities to come into contact with older adults with dementia, while for juniors and seniors, conferences should be held for sharing their experiences in and feelings about their encounters with such patients during clinical training.

Key words

Nursing students, dementia elderly people, images, education

1. はじめに

2013年10月1日現在、我が国の65歳以上の人口は過去最高の3,190万人となり、総人口に占める割合も過去最高の25.1%となった。平成26年度版高齢者白書によると、2035年には高齢化率は33.4%で3人に1人は高齢者と予想している。

高齢者の中でも認知症高齢者は、2010年では約200万人程度であるが、2020年には325万人まで増加するとされている(厚生労働省, 2011)。

認知症高齢者に関する社会的問題の一つとして、エイジズム

と陰性感情が存在する。エイジズムは、人種差別、性差別と並び第三のイズムとも呼ばれる。エイジズムは、Butlerによって1969年に初めて紹介された。Butlerは、エイジズムを、人種差別や性差別が肌の色とジェンダーに対して向けられるのと同じように「高齢であることを理由とする、人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス」と定義している¹⁾。

先行研究において、社会の認知症への理解が進んでいないという報告が多数されている。小中学生を対象とした認知症高齢者イメージの調査では、認知症啓発講義後には認知症高齢者に

* 1 : 聖徳大学看護学部看護学科・助教 / * 2 : 聖徳大学看護学部看護学科・教授

に対する共感するイメージは湧いたが、認知症啓発講義前のイメージは、記憶力だけでなく、嫌悪・偏見を伴うイメージが特徴的にみられていた²⁾。また、地域住民の認知症に対するイメージ調査では、30代以下の人は、認知症を他人事として捉えている傾向があり、他世代の住民では、認知症の人との関わり方に困惑していることを明らかにしている³⁾。さらに、一般住民を対象に、認知症についての認識を把握した調査では、認知症に対して怖いイメージを抱く人が少なくないなど、認知症に対する理解不足が明らかとなっている⁴⁾。以上より、我が国においても認知症高齢者に対する否定的イメージは存在する。

このような背景をもつ社会で生活している看護学生は、認知症高齢者をどのようなイメージとして捉えているのだろうか。先行文献によると、看護学生を対象にした高齢者へのイメージ調査では、老年看護学の講義前の1年次の学生は、身体機能が低下するというマイナスイメージや（岩井, 2010）、「遅い、保守的な、ひまな、弱い、にぶい、受動的など」否定的イメージを持っていた（小泉, 1999）。つまり、老年看護学を学ぶ前の看護学生の高齢者に対するイメージは、否定的イメージを多く持っているといえる。

また、看護学生は認知症高齢者に対するイメージも否定的イメージを抱いていると考えられるが、認知症高齢者に対するイメージの先行文献を詳細に検討することで、看護学生が認知症高齢者に対して抱くイメージを把握し、イメージに影響する要因の傾向を明らかにすることで、今後の老年看護学教育の示唆を得ることができると思われる。

2. 目的

看護学生が、認知症高齢者に対してどのようなイメージを抱いているか及びその影響要因を文献から明らかにし、今後の老年看護学教育への示唆を得ることである。

3. 方法

1) 先行文献選定

医学中央雑誌より、2004年から2014年までの10年間、キーワード「認知症」、「イメージ」、「学生」、「高齢者」に絞り込み条件として「原著論文」、「看護文献」を追加し24文献を抽出した。さらに、「イメージ」の類義語として「印象」、「感情」をそれぞれ「イメージ」の代替として文献抽出を行い、4文献と18文献を抽出した。これら抽出した文献を本研究目的と照らし合わせながら、共同研究者とともに協議し、14文献を分析対象とした。（表1）

2) 分析方法

(1)看護学生が認知症高齢者に抱いたイメージ、イメージの影響要因、老年看護学の講義・演習内容、実習内容を抽出した。

(2)抽出した項目を、共同研究者らと学年ごとに比較し、各学年の傾向を調査した。

4. 結果

1) 講義・演習の目的と内容（表2）

1年次では、老年看護学の概念を理解することを中心に講義が行われていた。2年次になるとペーパーバイシエントを使った事例や模擬患者との参加型演習が行われ、認知症高齢者とのコミュニケーション技術の学習や認知症高齢者の思いや考えに触れることを目的としている演習があった。3年次になると臨地実習が中心となるが、3年次前期に臨地実習前の講義が行われることもあり、ビデオ視聴や諸外国の認知症介護システムの理解、認知症高齢者の家族理解などを学んで臨地実習に臨む大学もあった。

2) 臨地実習の期間・場所・方法（表3）

1年次での臨地実習はみられず、2年次になると福祉センターやデイサービスを利用する健康な高齢者を対象とした臨地実習が実施される大学もあった。3年次になると、患者・療養者を1名受け持つ実習が多く行われていた。臨地実習先も、グループホーム、介護老人保健施設など慢性期や療養上生活の援助など目的に合わせて様々な場所で行われていた。

3) 看護学生の認知症高齢者に対するイメージ内容（表4）

(1)1年次の認知症高齢者に対するイメージ

肯定的イメージは、優しい、元気、活発、自由、安定などであった。否定的イメージとしては、怖くてかわいそうで自分はなりたくない人、介護が大変な人、不可解な行動をする人、感情の起伏が激しい、虚弱などがあがった。

(2)2年次の高齢者に対するイメージ

肯定的イメージの記載はみられなかった。否定的イメージは、物忘れが多い、コミュニケーションが取りにくい、つじつまが合わない、介護が大変な人、日常生活が必要、家族が迷惑、不可解な行動をとる人、怖くてかわいそうで自分はなりたくないなどがあがった。

(3)3年次の高齢者に対するイメージ

臨地実習前の肯定的イメージは、優しい、あたたかい、尊敬できる、明るい、颯爽、思いやりがあるなどであった。臨地実習後の肯定的イメージは、あたたかく可愛らしい、普通の高齢者と変わらない、自分の考えや感情を持っている人、その人の生きてきた世界を理解したなどであった。

臨地実習前の否定的イメージは、何をするのかかわからない、消極的、接するのに抵抗がある、卑屈な、汚い、怖い、弱いなどであった。

臨時実習後の否定的イメージは、怖くてかわいそうで自分は

表 1

発表年	研究タイトル	研究目的	対象学年	肯定的イメージ	否定的イメージ	影響要因	認知症高齢者との接触の有無
文献1	2004 看護基礎教育課程における老年看護学	認知症高齢者を捉えた視聴覚教材と図書を活用した講義がもたらす受容感情の変化を明らかにした。	短期大学2年生	記載なし	・自分こんなふうにはなりたくない・もどかしい・さみしそう・かわいそう・お世話するのは大変そう	・マスメディア (TV/新聞など)・授業・書籍・直接接した経験	無
文献2	2004 看護学生の痴呆性高齢者imageと痴呆性高齢者親について	認知症高齢者イメージと認知症高齢者親の内容を明らかにした。	短期大学1,2年生	・元氣・安定・よく動く・自由・活発・かわいらしい	・弱い・みずぼらしい・鈍い・意思疎通ができない・頑固・何を考えているのかわからない・邪魔者・生きにくそう	・マスメディア (TV/新聞など)・授業・家族や友人と話し合った	記載なし
文献3	2004 看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子	看護短期大学性の認知症高齢者に対するイメージとその看護観の学習深度による違いおよびその影響因子を明らかにした。	短期大学1,2,3年生	・自分の感情をもっている・普通の高齢者と変わらない	・不可解な行動をする人・情動・人格に障害がある人・介護が大変・こわくて自分は大変・家族が迷惑	・マスメディア (TV/新聞など)・授業・近親者認知症高齢者との関わり	有
文献4	2005 認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査	認知症高齢者に対する受容的感情とその影響要因を明らかにするため、1年生時に1回、2年生時に1回、3年生時に2回合計4回調査した。	短期大学3年生	・2年次講義後：やや好意的 ・3年次臨地実習後：好意的	・2年次講義前：やや否定的	・1年次：マスメディア (TV/新聞など)・2年次：授業・臨地実習・3年次：臨地実習	有
文献5	2006 看護学生の老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性	一般高齢者と認知症高齢者に抱くイメージを比較した。	大学3,4年生	記載なし	・活動性が低い・幸福ではない ・有能ではない	・臨地実習	有
文献6	2006 看護学生の認知症高齢者に対するイメージの変化およびその影響体験	認知症高齢者に対するイメージの変化、その影響体験を明らかにした。	短期大学3年生	・あたたかい・優しい・怖くない	・怖い・何をやるかわからない・接するのに抵抗がある	・臨地実習	有
文献7	2007 老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージ	臨地実習総論後に看護学生が認知症高齢者にどのようなイメージを抱いているのかを明らかにした。	短期大学3年生	・優しい・愛らしい・素直な	・非生産的・依存的・主観的	・臨地実習	有
文献8	2007 模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果	高齢者看護学演習「認知症高齢者の事例展開」における模擬患者参加型授業を学生がどのように受け止めたかを分析した。	短期大学2年生	記載なし	・こちらの話を聞き入れない・同じことを何度も繰り返す・コミュニケーションが取りにくい	・授業	記載なし
文献9	2008 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ	認知症高齢者のイメージと学年との関連を明らかにした。	大学全学年	・あたたかい	・遅い・邪魔をする・弱い・話にくい	・マスメディア (TV/新聞など)・授業・書籍・直接接した経験	有
文献10	2008 老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題	認知症高齢者の理解を目的に老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題を明らかにした。	短期大学3年生	・包容力	・記憶ができない ・環境に適應できない	記載なし	有
文献11	2008 認知症高齢者に看護学生が抱いた感情	臨地実習で認知症高齢者を受け持った学生が、認知症高齢者に対してどのような感情を抱いたのかをインタビューで明らかにした。	大学4年生	・楽しい	・思いが通じない・もどかしい・かわいそう・理解できない・落ち着きのない	・臨地実習	有
文献12	2010 看護学生の老年看護学実習レディネスとしての認知症高齢者イメージの構造	老年看護学臨地実習前の認知症高齢者イメージを明らかにした。	短期大学3年生	・優しい・あたたかい・明るい・頑強とした	・卑屈な・消極的・役に立たない・弱い	・授業	記載なし
文献13	2011 看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連	看護学生の実習前後におけるエイジズムの変化と、エイジズムを変化させる実習の学習要素について明らかにした。	短期大学3年生	記載なし	・同じ話をする・イライラする	・臨地実習	有
文献14	2012 グループホーム実習に関連した看護学生の思いと認知症高齢者イメージの変化	グループホーム実習前後に関連した思いと認知症高齢者イメージ特性を明らかにした。	大学4年生	臨地実習後 ・愛らしい・あたたかい・愛想のよい・優しい・明るい	臨地実習前 ・頑固な・遅い・弱い・孤立	・臨地実習	有

表2 講義・演習

	目的	内容	文献
1年次	・老年看護学概念と対象理解	・高齢者看護学概論	2
2年次	記載なし	・視聴覚教材「ぼけなんか恐くないーグループで立ち直る人々」の前半部分と、痴呆老人から見た世界ー老年期痴呆の精神病理 p251-255を活用した講義	1
	・高齢期に多い疾患をもつ高齢者を対象に看護過程を展開	・2事例のペーパーペイシエントを用いて実施「大腿骨頸部骨折により人工骨頭置換術を受けた高齢者」「福祉施設に入所している認知症高齢者」	8
	・認知症の病態を理解する ・加齢による身体変化を理解し、機能の保持・機能の低下・合併症への援助ができる ・その人の生きてきた歴史を把握し、その人らしさを尊重できる ・認知症高齢者の家族の理解と援助ができる ・他職種との協働について考えることができる	・模擬患者参加型演習 ・特別養護老人ホームに入所して間もなく、帰宅欲求を示す場面設定で実施する (具体的記載なし)	8
3年次	記載なし	・高齢者ケアに関するビデオ視聴・認知症概論講義 ・認知症高齢者の援助技術 ・認知症高齢者のアセスメント ・オーストラリアの認知症介護システム ・認知症高齢者の家族理解 (具体的記載なし)	7
4年次	記載なし	記載なし	

表3 臨地実習の場所・期間・方法

	場所	実習期間	方法	認知症高齢者と接した機会	文献番号
1年次	記載なし	記載なし	記載なし		
2年次	・老人福祉センター ・デイサービス	・1週間	・健康な高齢者を対象	記載なし	6
3年次	・介護老人保健施設 ・介護老人福祉施設	・2日間	記載なし	有	1
	・介護老人保健施設	・3日間	・1日1名×3日間入所中の高齢者を受け持つ	有	12
	・総合病院整形外科病棟	・2週間	・運動器疾患で回復・リハビリ期にある高齢者を1名受け持つ	有	6
	・特別養護老人ホーム	記載なし	・1名を受け持ち実習 入所者の「生きてきた道年表」を作成する	有	13
	・グループホーム	・1日間	・施設内で利用者体験をする 各ユニット2～3名の学生を配置し全員が体験する。学生が利用者となり、会話が始まる学生もいれば、テーブルに座ったものすることがなく、テレビを視聴するなど学生それぞれで過ごし、学生は利用者の気持ちを追体験する	有	10
4年次	・グループホーム	・2日間	記載なし		14

表4 学年別の認知症高齢者に対するイメージ

	肯定的イメージ	否定的イメージ
1年次	・優しい ・元気・活発 ・自由 ・安定	・怖くてかわいそうで自分になりたくない・介護が大変な人 ・不可解な行動をする人（徘徊 失禁）・物忘れが多い・邪魔者 ・コミュニケーションが取りにくい・感情の起伏が激しい ・虚弱・子供かえり・社会との断絶・社会的弱者・生きにくい存在
2年次	記載なし	・物忘れが多い・コミュニケーションが取りにくい・もどかしい ・同じことを何度も繰り返す・介護が大変な人（家族に負担をかける） ・日常生活援助が必要・家族が迷惑・不安感を抱く ・不可解な行動をする人（徘徊 失禁）・怖くてかわいそうで自分になりたくない・さみしそう・弱い・つじつまが合わない
3年次	<臨地実習前> ・優しい・あたたかい・尊敬できる・明るい ・颯爽・思いやりがある	・何をするのかわからない・接するのに抵抗がある ・消極的・卑屈な・汚い・怖い・弱いなど・非生産的・依存的・主観的 ・同じ話をする・イライラする・記憶ができない・環境に適應できない
	<臨地実習後> ・あたたかく可愛い ・普通の高齢者と変わらない ・自分の考えや感情を持っている人 ・その人の生きてきた世界を理解した	・怖くてかわいそうで自分になりたくない人
4年次	<臨地実習前> 記載なし	・頑固な・活動性が低い・幸福ではない・有能ではない ・遅い ・弱い・孤立
	<臨地実習後> ・愛らしい・あたたかい・愛想のよい・優しい・明るい ・一緒にいることが楽しい ・受け入れられて嬉しい	・予期しない言動にびっくり ・患者の考えが理解できない・落ち着きのない

なりたくない人があがった。

(4)4年次の高齢者に対するイメージ

臨地実習前の肯定的イメージの記載はみられなかった。臨地実習後の肯定的イメージは、受け入れられて嬉しい、一緒にいることが楽しいなどがあがった。

臨地実習前の否定的イメージは、頑固な、遅い、弱い、孤立などがあがった。

臨地実習後の否定的イメージは、予期しない言動にびっくり、患者の言動が理解できない、落ち着きのないなどがあがった。

4) 看護学生が認知症高齢者に対するイメージを抱く影響要因 (表1)

1・2年次の低学年は、TV／新聞などのマスメディアと授業に影響を受けていた(文献1, 2, 3, 4, 8, 9)。3・4年次になると臨地実習が影響を与える要因となっていた(文献4, 5, 6, 7, 11, 13, 14)。

5. 考察

1年・2年次の看護学生とも認知症高齢者のイメージは、概ね否定的結果であった。1年次の看護学生は、まだ看護の専門科目を学んでいないため、この段階では一般の人々と同様のイメージ、感情を持っていることが考えられる。

1年次の看護学生は、認知症高齢者に抱くイメージとして、「元気、活発、自由など」肯定的イメージを抽出した研究があった。認知症は、記憶障害、時間や場所の見当識障害、遂行機能障害などが原因で生活に支障をきたす病気である。しかし初期では、運動機能が比較的保たれていたため、元気・活発というイメージを抱くのではないかと考える。

1・2年次の看護学生の認知症高齢者へのイメージの影響要因は、TV／新聞などマスメディアがみられた。怖くてかわいそう、介護が大変な人、不可解な行動をする人など直接認知症高齢者と接した経験によるものではなく、マスメディアから得られる一方向性からの情報によるイメージと考える。近年、高齢社会の状況を反映して、認知症高齢者と介護をテーマにしたテレビ番組や映画が放映されることもある。吉本は、「そこには、認知症症状を呈する高齢者の姿が映し出され、その介護する家族や職員の苦労や介護の困難さが表現されているのではないかと述べている⁵⁾。このような意図的で一方向性の情報から、看護学生は影響を受けている可能性は高い。

マスメディアによる影響要因以外に、近親認知症高齢者との関わりも挙がっているが、平成26年度版高齢社会白書(内閣府)によると1980年の三世帯世帯は50.1%と約半数を超えていたが、徐々に割合が低下し2012年には15.3%まで低下しており、現代の家族構成は、昔と比べて高齢者との同居率も低く、今後も3世代間交流の増加は見込めないと考えられる。

2年次の看護学生の認知症高齢者への否定的イメージとして、1年次にはみられなかった日常生活援助が必要、家族が迷惑・不安感を抱くが新たにあがっていた。これは、1年次からの講義・演習で認知症高齢者に関する知識を得、さらにデイサービスセンターなどで見学することによってマスメディアからの情報のみではわからなかった認知症高齢者の症状や生活状況を理解することによって得られたイメージと考える。

また、ペーパーペイシエントや模擬患者での講義・演習を習得することで、3年次臨地実習前の看護学生のなかには、認知症高齢者へ肯定的イメージを持つ看護学生もみられた。優しい、

あたたかいなどの人柄イメージ、明るい、颯爽とした社会性イメージなど1・2年次にはみられなかった肯定的イメージが芽生え始めている。講義・演習の方法次第では、看護学生の新たな認知症高齢者の受容や感情の変化を起すことができることが示唆された。

しかし、3年次臨地実習前の看護学生の認知症高齢者への否定的イメージは、怖い、何をするのかわからない、接するのに抵抗があるなど1・2年次の否定的イメージと大きな変化はなかった。認知症高齢者に関する講義・演習を学び、認知症高齢者に対する考えや思いに変化が生じた看護学生もいたが、未だ接したことがない認知症高齢者に対して多くの看護学生は不安を抱いていると考えられる。

3年次臨地実習後の肯定的イメージとしては、普通の高齢者と変わらない人、自分の考えや感情を持っている人など、今までにない新たな肯定的イメージが見出されている。これは明らかに臨地実習経験によるものと考えられる。3年次になると患者(療養者)を受け持ち、看護過程を展開しながら援助を行う。このときに初めて、多くの看護学生は認知症高齢者と深く、長く接することになる。今までのTVや新聞などマスメディアでのイメージのみの認知症高齢者イメージから、講義・演習を積み重ねた認知症高齢者に対する知識を基盤に、実際の現場で認知症高齢者と接することで、今までの漠然とした否定的イメージから、肯定的イメージへと変化が表れていた。この変化は、今までの認知症高齢者に抱いていた漠然としたイメージから、臨地実習を通して直接関わることで、認知症高齢者の背景や疾患、性格、家族構成の情報、さらにコミュニケーションによって、一人の人間として理解することができたと考える。つまり、1・2年次のマスメディアによる一方向性の情報ではなく、認知症高齢者との関わりによって看護学生の認知症高齢者に対するイメージに変化を与えていたことがわかった。

4年次になると否定的イメージの内容も変化している。4年次臨地実習後の看護学生の認知症高齢者への否定的イメージの内容は、予期しない言動にびっくり、落ち着きのない、患者の考えが理解できないなど直接学生が認知症高齢者と関わる経験によって表出されたイメージであった。西村らによると「臨地実習中、絶えず肯定、否定的感情が動いており、特にBPSD (behavioral and psychological symptoms of dementia) 症状時は否定的感情が湧いていることがわかった⁶⁾。とある。武井によれば、「看護師はさまざまな感情を体験しているのですが、それを外に表すことは不適切とする感情規則があるため、強い感情がわくたびに、その感情をなんとか自分で管理しようとするのです。これが感情作業といわれる仕事です。」⁷⁾と述べており、看護学生も認知症高齢者への否定的感情やイメージを持ちながらも、自らの感情をコントロールしながら実習を行っていることが考えられる。

4年次になると肯定的イメージとして、受け入れられて嬉しい、一緒にいることが楽しいなど認知症高齢者を受け持った達成感がみられた。

6. 本学の老年看護学教育への示唆

老年看護学教育において、看護学生に対する認知症高齢者教育の重要性はますます高まっている。教員にとっては、看護学生が認知症高齢者をどうイメージしているかを知ることは、学生のレディネスを把握するために必要である。

本研究の結果により、全ての学年において、認知症高齢者に対する否定的イメージは存在していた。しかしながら否定的イメージの内容は、1・2年次のマスメディアによる一方向性からの否定的イメージと3・4年次の臨地実習での認知症高齢者との関わりで生じた否定的イメージに違いがあることがわかった。

1・2年次での講義・演習内容には、現在多くの大学で様々な取り組みがなされている。模擬患者を導入する演習や認知症高齢者の生活を追ったドキュメンタリー視聴などは講義・演習前と比べて認知症高齢者に対するイメージが肯定した研究結果もある。これらの講義・演習によって、認知症高齢者への否定的イメージを軽減させる一定の効果はあるが、やはり本研究でも明らかになったように臨地実習において、実際に認知症高齢者と接する機会を1・2年次早期に設け、その後、認知症高齢者の疾患、症状、特徴を改めて振り返ることで、画一的な認知症高齢者の否定的イメージを緩和できるのではないかと考える。

3・4年次臨地実習中の否定的イメージは、主にBPSD時などに現れた。逆に、低学年ではほとんど見られなかった認知症高齢者に対しての肯定的イメージが、4年次には芽生えてきている。このように看護学生は、認知症高齢者への肯定的イメージと否定的イメージが混在しながら臨地実習を経験していく。看護学生は、自己の様々な感情を抱きながらも対象者を尊重し、擁護するための倫理観の構築が必要である。したがって教員としては、その看護学生の自己の感情の揺れを自覚できるよう支援することが重要である。例えば、看護学生が認知症高齢者と接し、否定的感情が芽生えた。その時に、否定的感情を無理に抑制するのではなく、今自分は、この場面で否定的感情が芽生えたということをまずは自覚させる。それから、学生が一人で否定的イメージや感情を抱え込むのではなく、否定的イメージを抱いた場面、どのようなイメージを抱いたのか、否定的イメージをどのように考えるかなどを学生間で話し合う。そうすることで例え否定的イメージを全て消すことはできなくとも、専門職としてどのように援助を行っていくか一人一人が考えることができる。

また、看護学生が認知症高齢者とうまく援助が行えたことによって肯定的感情が芽生えることができれば、その場面や援助

の内容を学生間や教員と共有することで認知症高齢者に対し、より肯定的に捉えることができると考える。

老年看護学教育において重要なことは、認知症高齢者の強みを見出すことである。認知症高齢者は、身体・精神機能が健常高齢者と比べ、さらに低下しており、そのことが看護学生の認知症高齢者に対する否定的イメージにもつながっていると考えられる。しかし、認知症高齢者においても強みである残存している能力が数多くあることはわかっている⁸⁾。したがって、教員の支援によって、看護学生が認知症高齢者の強みを見出すことができれば、看護学生は、認知症高齢者に対する見方を変えたり、より肯定的に認知症高齢者を見ることができると考える。

7. 本研究の限界と課題

本研究の対象文献は、看護大学生、看護短期大学生いずれも対象とした。課程が異なり、学生のレディネスに違いがある可能性もあるため、今後は大学生と短期大学生の違いを検討する必要がある。また、本研究は我が国のみ対象としたので、今後は諸外国の看護学生との比較も必要と考える。

注

- 1) 原田謙. 老年社会科学. 2011, 33(1), p.74-81.
- 2) 村山陽, 小池高史, 倉岡正高, 藤原佳典. 認知症啓発講義が小中学生の認知症高齢者イメージに及ぼす影響. 日本認知症ケア学会誌. 2013, 12(3), p.593-601.
- 3) 大澤ゆかり, 松岡広子, 百瀬由美子. 地域住民の認知症に対する関心と不安およびイメージの検討. 愛知県立看護大学紀要. 2007, Vol.13, p.9-14.
- 4) 本間昭. 地域住民を対象とした老年期認知症に関する意識調査. 老年社会科学. 2011, 23(3), p.340-351
- 5) 吉本知恵, 横川絹恵. 看護学生の認知症高齢者に対するイメージと看護観および影響因子. 日本看護教育学会誌. 2004, Vol.14, No.1, July, p.35-45.
- 6) 西村美里, 大町弥生, 中山由美. 認知症高齢者に看護学生が抱いた感情. 藍野学院. 2008, 第22巻, P.12-21.)
- 7) 武井麻子. 感情と看護. 医学書院. 2001.
- 8) 堀内ふき, 大淵律子, 諏訪さゆり. 高齢者の健康と障害. MCメディア出版. 2011

文献

- 荒川博美, 仙田志津代. 看護学生の認知症高齢者への意識と地域での支援意欲との関連. 看護教育研究学誌. 2013, 第5巻2号. p.3-13.
- 岩井恵子. 看護学生の持つ高齢者イメージの分析. 関西医療大学紀要, Vol.4, p.110-121.
- 桂晶子, 佐藤このみ. 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ. 2008, 第11巻第1号, p.49-56.
- 加藤聖子. 高校生の福祉意識. 藤女子大学QOL研究所紀要. 2007, 2(1), p.55-63.
- 木下香織, 古城幸子, 馬本智恵. 老年看護学実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題. 看護・保健科学研究誌2008, 8(1), p.169-176
- 木村誠子, 片岡万里. 看護学生の老年看護学実習前における認知超高齢者イメージ特性. 高知大学学術研究報告2007, 第55巻, p.37-43.
- 草地潤子, 千葉京子. 老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 2007, 第20号, P.15-24.

- 小泉美佐子, 伊藤まゆみ. ライフ・ヒストリー・インタビューによる看護学生の高齢者イメージの変化: 高齢者一般のイメージとインタビューに応じた高齢者像の比較から. 群馬大学保健学紀要. 1999, 3, p.31-36.
- 佐野望, 檜原登志子. 看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連. 共立女子短期大学看護学科紀要. 2011, 第6号, p.1-10.
- 知ることから始めようーみんなのメンタルヘルス. 厚生労働省http://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_recog.html.2011.
- 平成26年度版高齢社会白書. 内閣府.
- 田中敦子, 鳴海喜代子. 看護基礎教育における老年看護学-教授方法の検証. 埼玉県立大学紀要. 2004, Vol.6. p.77-87.
- 田中敦子, 鳴海喜代子. 認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査. 埼玉県立大学紀要. 2005, Vol.7. p.59-66.
- 棚先由紀子, 光貞美香, 田村一恵. グループホーム実習に関連した思いと認知症高齢者イメージ変化. 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル. 2011, Vol.15, No.1. p.37-42.
- 中野雅子. 看護学生の老年看護学実習レディネスとしての認知症高齢者イメージの構造. 看護教育研究学会誌. 2010, 第2巻1号, P.15-21.
- 鳴海喜代子, 田中敦子. 看護学生の認知症性高齢者imageと認知症性高齢者観について. 埼玉県立大学短期大学紀要. 2000, 第6号, p.67-76
- 榊本朋子, 合田友美, 田邊美津子, 須田厚子. 看護学生の認知症高齢者との関係. 2008, 28, p39-45.
- 三澤久恵, 中澤明美, 佐野望. 模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果. 共立女子短期大学看護学科紀要. 2007, Vol.2. p69-80.
- 吉本知恵, 横川絹恵. 看護学生の認知症高齢者に対するイメージの変化およびその影響体験. 日本看護福祉学会誌. 2007, 12(2), p.67-77.